

# 水 附渡船

永井荷風

青空文庫



フランス人エミル・マンユの著書都市美論の興味ある事は既にわが随筆「大窪だより」の中に述べて置いた。エミル・マンユは都市に対する水の美を論ずる一章に於て、広く世界各国の都市と其の河流及び江湾の審美的關係より、更に進んで運河沼沢噴水橋梁等の細節に涉つて此を説き、猶其の足らざる処を補はんがために水流に映ずる市街燈火の美を論じてゐる。

今試に東京の市街と水との審美的關係を考ふるに、水は江戸時代より繼續して今日に於ても東京の美觀を保つ最も貴重なる要素となつてゐる。陸路運輸の便を欠いてゐた江戸時代にあつては、天然の河流たる隅田川と此れに通ずる幾筋の運河とは、云ふまでもなく江戸商業の生命であつたが、其れと共に都会の住民に対しては春秋四季の娯樂を与へ、時に不朽の価値ある詩歌絵画をつくらしめた。然るに東京の今日市内の水流は単に運輸の爲めのみとなり、全く伝来の審美的価値を失ふに至つた。隅田川は云ふに及ばず神田のお茶の水本所の豎川を始め市中の水流は、最早や現代の吾々には昔の人が船宿の棧橋から猪牙船に乗つて山谷に通ひ柳島に遊び深川に戯れたやうな風流を許さず、また釣や網の娯樂をも与へなくなつた。今日隅田川は巴里に於けるセーヌ河の如き美

麗なる感情を催さしめず、また紐育ニューヨークのホドソン、倫敦ロンドンのテエムスに對するが如く偉大なる富国ふこくの壯觀をも想像させない。東京市の河流は其の江灣なる品川しながはの入海いりうみと共に、さして美しくもなく大きくもなく又さほどに繁華びつちでもなく、誠に何方どつちつかずの極めてつまらない景色をなすに過ぎない。しかし其れにも係らずかへは東京市中の散歩に於て、今日こんにち猶比較的興味あるものは矢張やはり水流れ船動き橋かゝる処の景色である。

東京の水を論ずるに當つてまづ此これを區別して見るに、第一は品川の海灣、第二は隅田川なかがはろくがうがは、中川なか六郷川の如き天然の河流、第三は小石川の江戸川、神田の神田川、王子の音無おとなし川がはの如き細流さいりう、第四は本所深川日本橋きやうばし橋、下谷浅草等市中繁華の町に通ずる純然たる運河、第五は芝の桜川さくらがは、根津の藍染川あゐそめがは、麻布の古川ふるかは、下谷の忍川しのぶがはの如き其の名のみ美しき溝渠こうきよ、もしくは下水げすゐ、第六は江戸城を取巻く幾重の濠ほり、第七は不しのぼ忍池しのいけ、つのはずしふにさう角筈十二社かくはしの如き池である。井戸は江戸時代にあつては三宅坂側みやけざかそばの桜ヶ井さくらゐも清水谷しみづだにの柳の井やなぎゐ、湯島の天神てんじんの御福おみくの井ゐの如き、古来江戸名所の中に数へられたものが多かつたが、東京になつてから全く世人に忘れられ所在の地さへ大抵は不明となつた。東京市は此かくの如く海と河と堀と溝みぞと、仔細しさいに觀察くわんさつし来れば其等幾種類の水——既ち流れ動く水と淀よじんで動かぬ死したる水とを有する頗變化すこゝぶるに富んだ都会である。まづ品川いりうの入

海を眺めんにここは目下猶築港の大工事中であれば、将来如何なる光景を呈し来るや今  
 より予想する事はできない。今日まで吾々が年久しく見馴れて来た品川の海は僅に房  
 州通の蒸汽船と円ツこい達磨船を曳動す曳船の往来する外、東京なる大都會の  
 繁榮とは直接にさしたる関係もない泥海である。潮の引く時泥土は目のとゞく限り引続  
 いて、岸近くには古下駄に炭俵、さては皿小鉢や椀のかけらに船虫のうようよと這寄るば  
 かり。この汚い溝のやうな沼地を掘返しながら折々は沙蚕取りが手桶を下げて沙蚕を取  
 つてゐる事がある。遠くの沖には彼方此方に濤や粗朶が突立つてゐるが、これさへ岸より  
 眺むれば塵芥かと思はれ、その間に泛ぶ牡蠣舟や苔取の小舟も今は唯強ひて江戸の  
 昔を追回しやうとする人の眼にのみ聊かの風趣を覚えさせるばかりである。かく現代  
 の首府に対しては実用にも裝飾にも何にもならぬ此の無用なる品川湾の眺望は、彼の八ツ  
 山の沖に並んで泛ぶ此も無用なる御台場と相俟つて、いかにも過去つた時代の遺物らしく  
 放棄された悲しい趣を示してゐる。天氣のよい時白帆や浮雲と共に望み得られる安房上  
 総の山影とても、最早や今日の都會人には彼の花川戸助六が台詞にも誦込まれてゐ  
 るやうな爽快な心持を起させはしない。品川湾の眺望に対する興味は時勢と共に全く湮滅  
 してしまつたに係らず、其の代りとして興るべき新しい風景に対する興味は今日に於て

は未だ成立たずにゐるのである。

芝浦の月見も高輪の二十六夜待も既になき世の語草である。南品の風流を伝へた楼台も今は唯不潔なる娼家に過ぎぬ。明治二十七八年頃江見水蔭子がこの地の娼婦を材料として描いた小説「泥水清水」の一篇は当時硯友社の文壇に傑作として批評されたものであつたが、今よりして回想すれば、これすら既に遠い世のさまを描いた物語のやうな気がしてならぬ。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆柱と工場の煙筒の叢り立つた大川口の光景は、折々西洋の漫画に見るやうな一種の趣味に照して、此後とも案外長く或一派の詩人を悦ばす事が出来るかも知れぬ。木下杢太郎 北原白秋諸家の或時期の詩篇には築地の旧居留地から月島永代橋あたりの生活及び其の風景によつて感興を發したらしく思はれるものが尠くなかつた。全く石川島の工場を後にして幾艘となく帆柱を連ねて碇泊するさま／＼な日本風の荷船や西洋形の帆前船を見ればおのづと特種の诗情が催される。私は永代橋を渡る時活動する此の河口の光景に接するやドオデエがセエン河を往復する荷船の生活を描いた可憐なる彼の「ラ・ニベルネエズ」の一篇を思出すのである、今日の永代橋には最早や辰巳の昔を回想せしむべき何物もない。

さるが故に、私は永代橋えいたいばしの鉄橋をば却てかの吾妻橋あづまばしや両国橋りやうこくばしの如くに醜みにくいは思はない。新しい鉄の橋はよく新しい河口かこうの風景に一致してゐる。

私が十五六歳の頃であつた。永代橋えいたいばしの河下かはしもには旧幕府の軍艦が一艘商船学校の練習船として立腐れたちくさのまゝに繋がれてゐた時分、同級の中学生といつものやうに浅草橋あさくさばしの船宿こぶねから小舟を借りてこの辺へんを漕ぎ廻り、河中かはなかに碇泊して居る帆前船ほまへせんを見物して、こわい顔した船長から椰子やしの実を沢山貫つて帰つて来た事がある。其の折をり私達は船長がこの小さな帆前船ほまへせんを操つて遠く南洋まで航海するのだといふ話を聞き、全くロビンソンの冒険談を読むやうな感に打たれ、将来自分達もどうかしてあのやうな勇猛なる航海者になりたいと思つた事があつた。

矢張やはり其の時分の話である。築地つきぢの河岸かしの船宿から四挺艦しちやうろのボオトを借りて遠く千住せんじゆの方まで漕ぎ上つた帰り引汐ひきしほにつれて佃島つくだじまの手前まで下つて来た時、突然向から帆を上げて進んで来る大きな高瀬船たかせぶねに衝突し、幸さいはひに一人も怪我はしなかつたけれど、借りたボオトの小舷こへりをば散々に破こはしてしまつた上に櫂かいを一本折つてしまつた。一同は皆親みながゝりのものばかり、船遊びをする事も家うちへは秘密にしてゐた位くらゐなので、私達は船宿へ帰つて

万一破損の弁償金を請求されたらどうしやうかと其の善後策を講ずるために、佃島の砂の上にボートを引上げ浸水をかい出しながら相談をした。その結果夜暗くなつてから船宿の棧橋へ船を着け、宿の亭主が舷の大破損に気のつかない中一同一目散に逃げ出すがよからうといふ事になつた。一同はお浜御殿の石垣下まで漕入つてから空腹を我慢しつゝ水の上の全く暗くなるのを待ち船宿の棧橋へ上るや否や、店に預けて置いた手荷物を奪ふやうに引掴み、めいゝ後をも見ず、ひた走りに銀座の大通りまで走つて、漸と息をついた事があつた。その頃には東京府々立の中学校が築地にあつたのでその辺の船宿では釣船の外にボートをも貸したのである。今日築地の河岸を散歩しても私ははつきりとその船宿の何処にあつたかを確めることが出来ない。わづか二十年前なる我が少年時代の記憶の跡すら既にかくの如くである。東京市街の急激なる変化は寧ろ驚くの外はない。

おほかほすぢ  
大川筋 一帯の風景について、其の最も興味ある部分は今述べたやうに、永代橋河口の眺望を第一とする。吾妻橋 両国橋 等の眺望は今日の処あまりに不整頓にして永代橋に於けるが如く感興を一所に集注する事が出来ない。之を例するに浅野セメント会社  
社の工場と新大橋の向に残る古い火見櫓の如き、或は浅草蔵前の電燈会社と駒



形堂ただらうの如き、国技館こくぎかんと回向院ゑかういんの如き、或は橋場はしばの瓦斯タンクと真崎まつさき稻荷いなりの老樹らうじゆの如き、其等それら工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いづれも個々別々に私の感想を錯乱させるばかりである。されば私は此かくの如く過去と現在、既に廢頽と進歩との現象のあまりに甚しく混雜してゐる今日こんにちの大川筋おほかはすぢよりも、深川ふかがは小名木川をなぎがはより猿江裏ざるえうらの如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所の名残なごりも容易たやすくは尋ねられぬ程になつた処を選ぶ。おほかはすぢおほかはすぢせんぢゆせんぢゆりやうこくりやうこくに至るまで今日こんにちに於てはまだく工業の侵略が緩慢に過ぎてゐる。本所小梅ほんじよこうめから押上辺おしあげへんに至る辺も同じ事、新しい工場町こうぢやうまちとして此れを眺めやうとする時、今となつては却て柳島かへつやなぎしまの妙見堂めうけんだうと料理屋の橋本はしもととが目ざはりである。

運河の眺望は深川ふかがはの小名木川をなぎがは辺へんに限らず、いづこに於ても隅田川の兩岸に対するよりも一体にまとまつた感興を起させる。一例を挙げれば中州なかつと箱崎町はこさきちやうの出端でばなとの間に深く突入つきいつてゐる堀割は此れを箱崎町の永久橋えいきうはしまたは菖蒲河岸しやうぶがしの女橋をんなはしから眺めやるに水は恰あたかも入江の如く無数の荷船は部落の觀をなし薄暮風収まる時競きそつて炊烟すゐえんを棚曳たなひかすさま正に江南沢かうなんたくこく国の趣おもむきをなす。凡て溝渠運河の眺望の最も變化に富み且つ活氣を帯

びる処は、この中洲なかすの水のやうに彼方かなた此方こなたから幾筋いくすぢの細い流れが稍や広い堀割を中心にし  
て一個所に落合つて来る処、若もしくは深川の扇あふぎ橋ばしの如く、長い堀割が互に交叉して十  
字形をなす処である。本所柳原ほんじよやなぎはらの新辻橋しんつじばし、京橋八丁堀きやうばしはつちやうぼりの白魚橋しらうをばし、  
靈岸橋れいがんばしあたりの眺望は堀割の水の或は分れ或は合がする処、橋は橋に接し、流れは流れ  
と相激あひげきし、稍やともすれば船は船に突当らうとしてゐる。私はかゝる風景の中うち日本橋を背  
にして江戸橋の上より菱形をなした広い水の片側かたかはには荒布橋あらぬばしつゞいて思案橋しあんばし、片側  
には鎧橋よろひばしを見る眺望をば、其の沿岸の商家倉庫及び街上橋けうじやう頭の繁華雑沓と合せて、  
東京市内の堀割の中うちにて最も偉大なる壯觀を呈する処となす。殊に歳暮さいぼの夜景の如き橋  
上やうを往来する車の灯ひは沿岸の燈火とうくわと相乱れて徹宵水てつせうの上に揺ゆき動うく有あり様銀座街頭  
の燈火とうくわより遙はるかに美麗である。

堀割の岸には処々しよくに物揚場ものあげばがある。市中しちやうの生活に興味を持つものには物揚場の  
光景またも亦またしばし杖とぎを留とどむるに足りる。夏の炎天神田かんだの鎌倉河岸かまくらがし、牛込揚場の河岸かしなどを  
通れば、荷車の馬は馬方と共につかれて、河添かはぞひの大きな柳の木の下したに居眠りをしてゐる。  
砂利じやりや瓦かはつちや川土かはつちを積み上げた物蔭にはきまつて牛飯ぎやうめしやするとんの露店ろてんが出てゐる。時  
には水屋も荷おろを卸してゐる。荷車の後押しをする車力の女房は男と同じやうな身仕度をし

て立ち働き、其の赤児あかごをば捨児すてこのやうに砂の上に投出してみると、其の辺へんには瘦やせた鶏けいが落ちこぼれた餌えさをもりつくして、馬の尻しつから馬糞ばふんの落ちるのを待つてゐる。私はこれ等の光景あきざねに接すると、必かならず北齋きたさい或はミレエを連想して深刻なる絵画的写実の感興いざなを誘いざなひ出され、自らみづか絵事くわいじの心得こころえなき事を悲しむのである。

以上かりう河流かと運河うんがの外なほ猶なほ東京の水の美に關しては、処々しよくの下水みづかが落合おちあつて次第しだいに川の如ごとき流ながをなす溝みぞ川の光景あきざねを尋ねて見なければならぬ。東京の溝みぞ川がわには折々をりく可笑をかしい程ほど事実と相違ちがひした美しい名ながつつけられてゐる。例へば芝しば愛宕あたご下したなる青松寺せいしようじの前まへを流れる下水みづかを昔むかしから桜さくら川がわと呼び又今日こんにちでは全く埋うづめつて尽つされた神田鍛冶町かんだかぢやうの下水みづかを逢あひそめが、橋場はしば総泉寺そうせんじの裏手うらでから真崎まつさきへ出る溝みぞ川がわを思おもひが、また小石川こいしかは金剛寺こんがうじ坂さか下したの下水みづかを人參にんじん川がわと呼ぶ類たぐひである。江戸時代にあつては此等の溝みぞ川がわも寺院の門前かどまへや大名屋敷の堀外へいそとなど、幾分か人の目につく場所を流れてゐたやうな事から、土地の人にはその名の示すが如ごとき特殊な感情を与へたものかも知れない。然し今日こんにちの東京になつては下水を呼んで川となすことすら既に滑稽おほげなほど大袈裟おほげである。かくの如く其の名と其の實まこととの相あひ伴ともなはざる事は独り下水の流れのみには留とどまらない。江戸時代とまた其の以前

からの伝説を継承した東京市中各処の地名には少しく低い土地には千仞せんじんの幽谷を見るやうに地獄谷ぢごくだに（麴町にあり）千日谷せんにちだに（四谷鮫ヶ橋に在り）我善坊ヶ谷がぜんぼうだに（麻布に在り）なぞいふ名がつけられ、また少しく小高い処は直ちに峨々たる山岳の如く、愛宕山道あたごやまどうか灌山待乳山んやままつちやまなどと呼ばれてゐる。島なき場所も柳島やなぎしま三河島みかはしま向島むかうじまなどと呼ばれ、森なき処にも鳥からすもり森もり、鷺の森さぎもりの如き名称が残されてある。始めて東京へ出て来た地方の人は、電車の乗換場のりかへばを間違へたり市しちゆう中の道に迷つたりした腹立はらだちまぎれ、斯る地名の虚偽を以てこれ亦また都会の憎むべき悪風として観察するかも知れない。

溝川みぞかはは元もとより下水に過ぎない。紫むらさきの一本にも芝の宇田川うだがはを説く条に、「溜池ためいけの屋や舗しきの下水落ちて愛宕あたごの下より増上寺ぞうじやうじの裏門を流れて爰こゝに落おつる。愛宕あたごの下、屋敷々々の下も落ち込む故宇田川橋うだがはばしにては少しの川のやうに見ゆれども水上みなかみはかくの如し。」とある通り、昔から江戸の市しちゆう中には下水の落合つて川をなすものが少くなかつた。下水の落合つて川となつた流れは道に沿ひ坂の麓を廻り流れ流れて行く中に段々広くなつて、天然の河流又は海に落込むあたりになると何うやら此うやら伝馬船てんませんを通はせる位になる。麻布あさふの古川ふるかはは芝山内しばさんないの裏手近く其の名も赤羽川あかばねがはと名付けられるやうになると、山内さんない

の樹木と五重塔ごちゆうのたうの聳そびゆる麓ふもとを巡めぐつて舟楫しゅうしふの便べんを与よふるのみか、紅葉こうえふの頃は四糸派しどうはの絵ゑにあるやうな景色を見せる。王子わうじの音無川おとなしかはも三河島みかはしまの野のを潤うるほした其そのの末はは山谷堀さんやぼりとなつて同じく船うかを泛うかべる。

下水みぞかはと溝川みぞかははその上に架かつた汚きたない木橋きはしや、崩つぶれた寺てらの塀へい、枯かれかゝつた生垣いけがき、または貧ひんしい人家にやの様さまと相対さうたいして、屢憂鬱しほくなる裏町うらまちの光景こうけいを組織そくしする。既すでち小石川柳町こいしかはやなぎちやうの小流こながれの如ごとき、本郷ほんがうなる本妙寺ほんめうじ坂下さかしたの溝川みぞかはの如ごとき、団子坂下だんごさかしたから根津ねづに通とほずる藍染川あゐそめがはの如ごとき、かゝる溝川みぞかは流ながる、裏町うらまちは大雨たいうの降ふる折をりと云いへば必ず雨潦あめらうの氾濫うれうに災害さいがいを被かる処ところである。溝川みぞかはが貧民窟ひんみんくわくに調和てうわする光景こうけいの中うち、其そのの最も悲惨ひつぱんなる一例いちれいを挙げれば麻布あふの古川橋ふるかははしから三之橋さんのはしに至いたる間の川筋あひだであらう。ぶりき板いたの破片やぶや腐くつた屋根板やぶで葺ふいたあばら家やは数町あに渡わたつて、左右さいうから濁水だくすゐを挟さんで互たがひにその傾かたいた廂むさしを向むかひ合あせてゐる。春秋はるあき時候じこうの变かり目めに降りつゞく大雨たいうの度たびごと毎ごとに、芝しばと麻布あさふの高台たかだいから滝たきのやうに落ちて来る濁水だくすゐは忽たちち両岸りやうがんに氾濫うれうして、あばら家やの腐くつた土台つちだいから廳やがては破やぶれた畳たたみまでを浸ひたしてしまふ。雨あめが霽はれると水みづに濡ぬれた家具かぐや夜具やぐ蒲団ふだんを初はじめ、何なにとも知しれぬ汚きたならしい襪はくわの数かず々は旗のぼりか幟のぼりのやうに両岸りやうがんの屋根やぶや窓まどの上に曝さらし出でされる。そして真黒まぐらな裸体らたいの男おとこや、腰卷こしまき一つの汚きたない女房にやうばうや、又は子供こむすめを背負せおつた児こ娘むすめまでが箆せびや籠かごや桶おけを持つて濁

流の中に入りつ乱れつ富裕な屋敷の池から流れて来る雑魚を捕へやうと急つてゐる有様、通りがりの橋の上から眺めやると、雨あがりの晴れた空と日光の下に、或時は却つて一種の壯觀を呈してゐる事がある。かゝる場合に看取せられる壯觀は、丁度軍隊の整列若しくは舞台に於ける並大名を見る時と同様で一つくに離して見れば極めて平凡なものも集合して一団をなす時には、此処に思ひがけない美麗と威厳とが形造られる。古川橋から眺める大雨の後の貧家の光景の如きも矢張此一例であらう。

江戸城の濠は蓋し水の美の冠たるもの。然し此の事は叙述の筆を以てするよりも寧ろ絵画の技を以てするに如くはない。それ故私は唯代官町の蓮池御門、三宅坂下の桜田御門、九段坂下の牛ヶ淵等古來人の称美する場所の名を挙げるに留めて置く。

池には古來より不忍池の勝景ある事これも今更説く必要がない。私は毎年の秋竹の台に開かれる絵画展覧会を見ての帰り道、いつも市氣満々たる出品の絵画よりも、向ヶ岡の夕陽敗荷の池に反映する天然の絵画に対して杖を留むるを常とした。そして現代美術の品評よりも独り離れて自然の画趣に恍惚とする方が遙に平和幸福である事を知るのである。

しのぼずのいけ  
 不忍池は今、日市中に残された池の中の最後のものである。江戸の名所に数へられ  
 た鏡ヶ池や姥ヶ池は今更尋る由もない。浅草寺境内の弁天山の池も既に町家となり、  
 また赤坂の溜池も跡方なく埋めつくされた。それによつて私は将来不忍池も亦同様  
 の運命に陥りはせぬかと危むのである。老樹鬱蒼として生茂る山王の勝地は、其の  
 翠緑を反映せしむべき麓の溜池あつて初めて完全なる山水の妙趣を示すのである。若  
 し上野の山より不忍池の水を奪つてしまつたなら、それは恰も両腕をもぎ取られた人  
 形に等しいものとなるであらう。都会は繁華となるに従つて益々自然の地勢から生ずる  
 風景の美を大切に保護せねばならぬ。都会に於ける自然の風景は其の都市に対して金力を  
 以て造る事の出来ぬ威厳と品格とを帯させるものである。パリにもロンドンにもあんな大き  
 な、そしてあのやうに香しい蓮の花の咲く池は見られまい。

都会の水に關して最後に渡船の事を一言したい。渡船は東京の都市が漸次整  
 理されて行くにつれて、即ち橋梁の便宜を得るに従つて懸ては廃絶すべきものであらう。  
 江戸時代に遡つて之を見れば元禄九年に永代橋が懸つて、大渡しと呼ばれた大川口  
 の渡場は江戸鹿子や江戸爵杯の古書にその跡を残すばかりとなつた。それと同じやう

に御厩河岸の渡し、鐵の渡を始めとして市中諸所の渡場は、明治の初年架橋工事の竣成と共にいづれも跡を絶ち今は只浮世絵によつて当時の光景を窺ふばかりである。

然し渡場は未だ悉く東京市中から其の跡を絶つた訳ではない。両国橋を間にして其の川上に富士見の渡、その川下に安宅の渡が残つてゐる。月島の埋立工事が出来ると共に、築地の海岸からは新に曳船の渡しが出来た。向島には人の知る竹屋の渡しがあり、橋場には橋場の渡しがある。本所の豎川、深川の小名木川辺の川筋には荷足船で人を渡す小さな渡場が幾個所もある。

鉄道の便宜は近世に生れた吾々の感情から全く羈旅とよぶ純朴なる悲哀の詩情を奪去つた如く、橋梁はまた遠からず近世の都市より渡船なる古めかしい緩かな情趣を取除いてしまふであらう。今日世界の都会中渡船なる古雅の趣を保存してゐる処は日本の東京のみではあるまいか。米国の都市には汽車を渡す大仕掛けの渡船があるけれど、竹屋の渡しの如く、河水に洗出された木目の美しい木造りの船、檣の櫓、竹の棹を以てする絵の如き渡船はない。私は向島の三囲や白髯に新しく橋梁の出来る事を決して悲しむ者ではない。私は唯両国橋の有無に係らず其の上下に今猶渡場が残されてある如く隅田川其他の川筋にいつまでも昔のまゝの渡船のあらん事



を希ふのである。

橋を渡る時欄干の左右からひろ／＼した水の流れを見る事を喜ぶものは、更に岸を下つて水上に浮び鷗と共にゆるやかな波に揺られつゝ向の岸に達する渡船の愉快を容易に了解する事が出来るであらう。都会の大道には橋梁の便あつて、自由に車を通ずるに係らず、殊、更岸に立つて渡船を待つ心は、丁度表通に立派なアスフワルト敷の道路あるに係らず、好んで横町や路地の間道を抜けて見る面白さと稍似たものであらう。渡船は自動車や電車に乗つて馳せ廻る東京市民の公生涯とは多くの關係を持たない。然し渡船は時間の消費をいとはず重い風呂敷包みなぞ背負つてテク／＼と市中を歩いてゐる者供には大なる休息を与へ、また吾等の如き閑散なる遊歩者に向つては近代の生活に味はれない官覚の慰安を覚えさせる。

木で造つた渡船と年老いた船頭とは現在並びに将来の東京に対して最も尊い骨董の一つである。古樹と寺院と城壁と同じく飽くまで保存せしむべき都市の宝物である。都市は個人の住宅と同じく其の時代の生活に適當せしむべく常に改築の要あるは勿論のことである。然し吾々は人の家を訪うた時、座敷の床の間に其の家伝来の書画を見れば何となく奥床しく自ら主人に対して敬意を深くする。都会も其の活動的ならざる他の一面に於

て極力伝来の古蹟を保存し以て其の品位を保たしめねばならぬ。この点よりして渡船  
の如きは独り吾等一個の偏狭なる退歩趣味からのみ之を論ずべきものではあるまい。

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆33 水」作品社

1985（昭和60）年7月25日第1刷発行

1996（平成8）年2月29日第15刷発行

底本の親本：「荷風全集 第一三巻」岩波書店

1963（昭和38）年2月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水 附渡船

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>